

地中海世界の歴史的な集合住宅に関する研究

代表 陣内秀信（法政大学工学部建築学科 教授）

委員 高村雅彦（法政大学工学部建築学科 助教授）

委員 恩田重直（法政大学大学院 博士課程）

「研究報告要旨」

本研究では、地中海世界の中でも、早い時代から興味深い都市型の住宅文化を培った南イタリア、スペインのアンダルシアの地域を選び、旧市街の中に今なお人々に住みこなされている集合住宅を対象として調査分析を行った。その空間構成、それらが集合して生まれる町並みの在り方などハードな面を分析する一方、家族構成、住み方、維持管理の仕方など、ソフトな面からも明らかにした。

南イタリアでは特に、ナポリの南に位置するアマルフィを対象に、フィールド調査を実施し、「集合住宅」という観点から多くの住宅を対象として実測と住み方に関するより詳細な聞き取りの調査を行った。海に開く溪谷の斜面に中世以来、水平、垂直方向に住宅が高密に発展して行った動的な形成過程、その中で、多くの家族が一つの建物の中に動線や中庭・前庭などをうまく共有しながら、安全で快適な居住空間を実現していった過程を明らかにした。斜面の特徴が大いに生かされ、様々なレベルからのアプローチが可能になったこと、どの住戸もバルコニーからの眺望をもちえたこと等を明らかにした。

アンダルシアでは特に、セビーリャの南東に位置する小都市アルコス・デ・ラ・フロンテーラを対象に、フィールド調査を実施し、パティオ型の住宅を実測、聞き取り調査しながら、この町において集合住宅化が進行した歴史的なプロセスについて分析考察した。中世のアラブ支配の下での血の繋がった大家族での住まいの在り方が、キリスト教の文化の中で変容し、集合住宅化してきたこと、近代の住まい方の変化で集合住宅化が加速されたことを解明した。複数の家族が同じ建物に住むためのルール、工夫が住民の間でどのように成立しているかをも明らかにした。

今後の我が国における質の高い集合住宅を計画し、そこに住みこなし、都市型居住の文化を形成していくにも、地中海世界のこのような経験から学ぶ意義が大きいことを確認できた。